

訳)を随所に長く引用しているが、確かにこの書はトマスの真の姿がよりよく理解されていく切っ掛けになるに違いない。

---

Matthias Laarmann

*Deus, primum cognitum. Die Lehre von Gott als dem Ersterkannten des menschlichen Intellekts bei Heinrich von Gent († 1293)*

Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters

Neue Folge, Band 52, Aschendorff Munster, 1999, XII+528 S.

加 藤 雅 人

本書は、ガンのヘンリクス (d.1293) の「第一に認識されるもの (primum cognitum) としての神」説について、主として神学的観点から考察することを企てたものである (S.12)。議論の出発点は、人間知性の中にある有や善といった第一諸概念の内容についての考察である (S.2)。ヘンリクスにとってこれは哲学的であると同時に神学的な問題設定で、そこで主として論じられるのは、そうした第一諸概念によって神 (の本質) がどのようにして人間の認識へと顕現するかという問題である。本書が目指すのは、ヘンリクスの「第一に認識されるものとしての神」説を「13世紀後半に行われた議論の文脈の中に置き、〈第一に認識されるもの〉説の起源と経過の解明に」貢献することを意図した、「成立と影響の歴史研究」である (S.11)。著者はテキスト分析の方法を「文献史的かつ原典分析的な探求手順によって補完された記述的・実証的方法」(S.13) と説明し、これまでヘンリクス研究においてほとんど引用されなかったテキストを詳細に正確にパラフレーズするという仕方でもこれを実現している。

本書は4部に分かれる。まず、第I部「ガンのヘンリクスの生涯、著作、神学的統制」(S.18-77) においては、彼の生涯と著作についての研究の現状が整理され、また彼の神学の方向性について簡単に説明される。本書の中心は、第II部「アポステリオリな神認識の射程とその影響力、その成立と発展、そしてヘンリクスによる批判」(S.18-77)、そして第III部「アプリオリな神の存在証明の一要素としての第一の神認

識についてのガンのヘンリクスによる根拠付け」(S.78-234)である。著者はヘンリクスの『定期討論のスマ (*Summa quaestionum ordinariorum*)』第21項から第24項までのテキスト(ヘンリクスのスマにおける項と問の用語法は、たとえばトマス・アクィナスのそれとは逆で、項が問の上位概念で複数の問をまとめる単位となっている)を詳細に分析し、神の認識可能性について(第II部)、〈第一に認識されるもの〉としての神について(第III部)それぞれ考察している。要するに、本書の主題は神の認識可能性であり、〈第一に認識されるもの〉としての神がその全体を貫く視点なのである。第IV部「ヘンリクスの思想の全般的影響史の文脈における、彼の〈第一に認識されるもの〉説の継承。厳肅博士の史記への貢献」(S.337-457)は、ヘンリクスの全般的思想(〈第一に認識されるもの〉説を含めて)の影響史の記述に向けられている。

ここでは、神の認識可能性に関するヘンリクスの議論のうちとくに重要と思われる次の2点、すなわち(1)アナログア説(S.104-116)、(2)アプリオリな神の存在証明(S.174-188)について紹介し論評する。

(1) アナログア説について。著者によれば、この説は人間が神について「あるか(an sit)」と「何であるか(quis sit)」を知ることを保証するものである。まず、ヘンリクスは古典的なアナログア説を詳述する。すなわち、アナログアとは実在的有の次元にあり、被造物の神への形相的模倣による一致を説明するものである(S.107-109)。これに加えて、ヘンリクスは概念的有の次元における被造物と神との一致の可能性についても論じる。すなわち、アヴィセンナの〈有である限りの有〉は最初は神とも被造物とも認識されうる。なぜ有の概念を神と被造物とに無差別に適用するという誤った解釈の可能性があるのか。それは、〈有である限りの有〉すなわち無限定な有を把握する人間の概念の中に二種類の無限定が混ざっているからである。一つは、神に適合する否定的無限定、すなわち自己の無限性によってさらなる限定がありえない非限定である。もう一つは、被造物に適合する欠如的無限定、すなわち現実的な諸々の限定が未だなされていない未限定である。有の非限定と未限定は内容的には異なるが、両者の不可識別性による類似性のため人間によって一つの概念として誤って把握される(S.111-114)。これは、現代のヘンリクス研究者が、そして(著者は言及していないが)ドゥンス・スコトゥスがしばしば引用するヘンリクスの説明である。しかし、これだけでは真なるアナログアの説明にはならない。ヘンリクスのアナログ

ア説は、そのような心理的基盤による無限定な有の概念における神と被造物との一致に基づくのではなく、実在的有の存在的基础に基づいている (S.114-115)。

たしかに著者の言うように、ヘンリクスはアナログアの心理的基盤と存在的基础の両方について語っている。しかし、アナログアは、心理的あるいは存在적「一致」に基づくとするよりは、言語的「一致」と心理的かつ存在的「先後関係」に基づくとするべきではないか。書評者の理解によれば、存在的基础は、一なる目的因、一なる形相因、一なる作出因である神の有に対して、その結果であるすべての被造物の有が「分有」という仕方ですべての被造物の有が「帰属する」という存在論的先后関係である。また、心理的基盤とは、被造物の無限定(未限定)な有が無限定な有として知られるためには、それに本性上先立って神の無限定(非限定)な有が知られていなければならないという認識論的先后関係である。「有」という同一の語が認識論的かつ存在論的先后関係に基づいて、神と被造物の両者に「一義的に」ではなく、かといって両者に「同名異義的に」でもなく、神に第一義的にそして被造物に第二義的にという仕方ですべて「アナログア的に」述べられるのである。

(2) アプリオリな神の存在証明について。神の存在証明は神の認識可能性という議論を構成する重要な要素である。ヘンリクスはまず第一にアポステリオリな証明を導く。この証明の構想はトマス・アクィナスによるとみなされているが、アクィナスの証明それ自体は *Summa Halensis* の証明から多くを組み入れたものである (S.134-174)。アポステリオリな証明は被造物の第一原因への依存関係の分析によって「神がある」ということを知る方法である。ヘンリクスはこれを自然学の仕事とみなした。これに対して、「神が何であるか」を知るための方法がアプリオリな証明であり、それは形而上学の仕事である。ヘンリクスの神認識の道は、神の存在だけでなく本質も何らかのしかたで知るという方向へむかう。ヘンリクスはこのような神認識をアヴィセンナの可知的なものの普遍的命題の説の中に見いだした。それは、有、一、善といった第一志向概念一般を含む自明な命題のことである。ヘンリクスはそのような命題を構成する第一志向概念を神性の顕現へと上昇させる (S.178-180)。これはアウグスティヌスを典拠とする。人間は個々の善から善一般の考察へ、そしてさらに善そのものの考察へと超越することができる。ここでは、アウグスティヌス的な「善そのもの」(=神)の概念が、アヴィセンナ的な普遍的善の概念と同一視されている。このようにヘンリクスのアプリオリな神認識は、アヴィセンナとアウグスティヌスを典拠

として、本質の可知性のレベルで進められている。それは可感的なものを出発点とするが、可感的事物によって検証されるのでは決してない (S.180-184)。

たしかに、ヘンリクスは可感的事物の検証の道ではなく、可知的なものの普遍的命題の道によって神の存在が知られると言う。しかし、これが果たして著者の言う「アプリアリな証明」なのか、というのが書評者の疑問である。「証明」という以上は論理が求められるが、ヘンリクスがここで行っていることは、アヴィセンナの「最初の刻印において直ちに心に刻印される有」がアウグスティヌスの「端的な有」すなわち神であるという、たんなる解釈や信念を述べているにすぎないのではないか。そのような疑問について、著者の説明は物足りない。もちろん、ヘンリクスの解釈を支えるためにアナログア説 (上述) や神認識の諸段階説 (S.289-311) などが説明原理として持ち出される。しかし、結局それらの説は人間の「最初の自然的な混雑した有の認識」のなかに神の認識が「挿入されて」いるというヘンリクスの確信の記述にすぎず、「証明」とはほど遠いものである。書評者の考えによれば、人間知性がこの世界において「この有」「あの有」を有として知るためには、本性上先に有という普遍概念を知っていなければならない、被造物の無限定 (未限定) な有を有として知るためには、本性上先に神の無限定 (非限定) な有を知っていなければならない。要するに、所与の有を有として把握するためには、それに先だつて有そのものである神の本質のアプリアリな直観が前提されていなければならない、というのがヘンリクスの隠された論理ではないかと思われる。もっとも、あらゆる事物を有として把握するのは *be* 動詞に規定された印欧語の特徴であり、それと異なる言語体系の中では、有はかならずしも第一概念ではないというのが書評者の現在の見解ではあるが。

しかし、著者の文献学的歴史的考察は非常に卓越している。とくに、自然的な神認識の説の起源についての概観 (S.234-256)、およびアウグスティヌスの *abditum mentis* の説の受容に関する記述 (S.323-336) は独自の視点を提示している。また、13世紀から20世紀に及ぶ影響史の考察 (S.337-457) は、これまで考察されなかったヘンリクスの思想の拡がりを明らかにしている。その意味で、本書はヘンリクス研究にとって重要な一書であることは間違いない。

---